さい帯血バンクNOW

第49号

2009年9月15日発行
日本さい帯血バンクネットワーク
発行者：中林正雄（会長）
〒105-0012　東京都港区芝大門1-1-3　日本赤十字社東館６階
TEL 03-5777-2429 FAX 03-5777-2417　http://www.j-cord.gr.jp/

「そして明日から」Footmarks & Our Future

ネットワーク設立10周年記念大会を盛大に開催

記念式典には秋篠宮殿下ご夫妻もご臨席

日本さい帯血バンクネットワークは、1999年8月11日に設立総会を開いて発足しました。それから10年の歳月が過ぎ、今年8月29日と30日の2日間にわたって、「そして明日から　Footmarks & Our Future」と題された設立10周年記念大会が東京の早稲田大学国際会議場井深大記念ホールで、秋篠宮殿下と妃殿下をお迎えして記念式典を始め、多彩なシンポジウムなどに多くの関係者や一般市民も参加して盛大に開催されました。

第１日目（８月29日）の午後５時から秋篠宮両殿下のご臨席を賜り、記念式典が行われました。秋篠宮殿下ご夫妻はさい帯血事業に対しての深いご理解をお持ちであることから、今回のご臨席に至ったもので、10周年という特別の時に際し、私たち日本さい帯血バンクネットワークにとっては、誠に栄誉なことになりました。

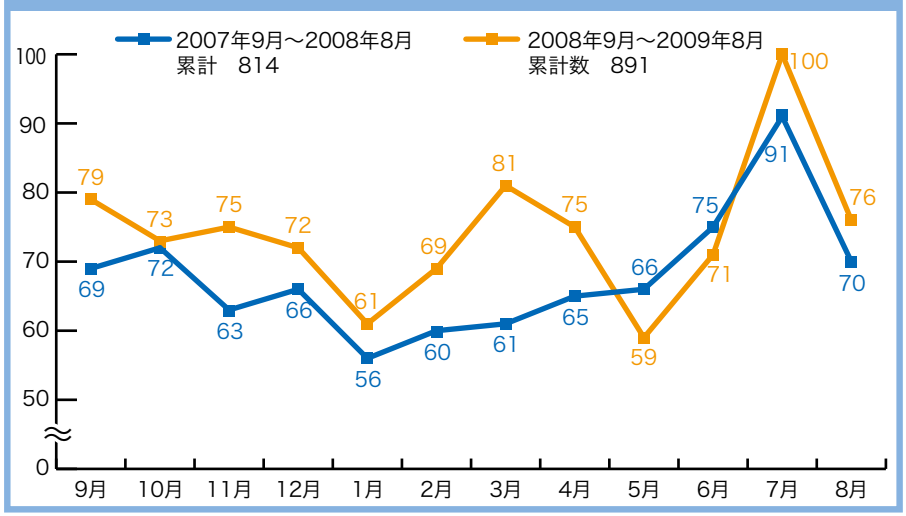
会場に到着された秋篠宮ご夫妻

式典は、さい帯血バンクネットワークの中林正雄会長の式辞に続いて、秋篠宮殿下が「さい帯血バンク事業のさらなる充実が図られ、１人でも多くの患者さんが病気を克服することを祈念します」とおことばを述べられました。舛添要一厚生労働大臣の祝辞（健康局長の代読）と、さい帯血移植を世界で最初に成功させた世界的権威であるエリアーヌ・グルックマン博士の祝辞に続いて、さい帯血バンクネットワークとわが国のさい帯血移植の発展に大きく貢献した４名の功労者が表彰され、またネットワークの活動に大きな協力をいただいた２名の方に中林会長から感謝状が贈呈されました。

続いて、記念講演「さい帯血移植の軌跡と未来」が加藤俊一副会長から、また事業報告が原宏事業運営委員長からあり、ネットワークの10年の歩みを語りました。秋篠宮両殿下も壇上から会場内の席に移られ、最後まで講演と報告に熱心に耳を傾けられていました。

非血縁間さい帯血移植状況（2009年8月31日現在の速報値）

移植数（累計）5709　公開数 31981



世界のさい帯血移植をリードする日米欧5人の発表

国際シンポジウム「さい帯血移植への新たな世界的洞察」

記念大会２日目（８月30日）の午後、1988年に世界で初めてのさい帯血移植でファンコニ貧血の患者さんを救命したフランスのグルックマン教授、それを支える基礎的なデータを提供したアメリカのブロックスマイヤー教授、そして現在の世界のさい帯血移植をリードしているワグナー教授（米）をお招きして日英同時通訳付きで国際シンポジウムを開催しました。グルックマン教授は現在ユーロコード（Eurocord＝ヨーロッパ諸国が参加するさい帯血バンク連合組織）の代表も務め、ヨーロッパの成績をはば広く報告しました。ブロックスマイヤー教授は、さい帯血中の造血幹細胞の増幅や、効率良く骨髄に到達させる（homing）ための研究成果を示しました。また、ワグナー教授はさい帯血移植の成績向上のためにさまざまな臨床研究に精力的に取り組み、複数さい帯血移植やNK細胞輸注などの有用性を紹介しました。日本からは非血縁者間移植では骨髄バンクからの移植よりもさい帯血移植の方が優れており、同胞間移植とも勝るとも劣らないという驚くべき成績を発表してきた東大医科研の高橋聡准教授が、医科研におけるその詳細な臨床成績を報告しました。また、虎の門病院の谷口修一血液内科部長は、様々な疾患に対して年齢や臓器障害の壁を越えるミニ移植を333例実施し、その成績を発表しました。さらに、さい帯血移植で多く見られる生着不全は、必ずしも細胞数の問題だけではなく、血球貪食症候群による症例も３分の２におよぶという新しい考え方を提唱し、その対応策も示しました。充実した10周年記念事業を飾るにふさわしいさい帯血移植の将来の無限の可能性を議論できたシンポジウムとなりました。

ブロックスマイヤー博士

ワグナー博士

グルックマン博士

谷口修一博士と高橋聡博士

会場からは活発な質問も

■善意のお気持ちに感謝します■

福岡県	林田 康夫様	200,000円
東京都	永島 英子様	100,000円
東京都	富士ゼロックスシステムサービス株式会社ボランティア基金様	50,000円
東京都	富士ゼロックスシステムサービス株式会社様	50,000円
埼玉県	大寺 信行様	12,000円
長崎県	松本 智子様	10,000円
福岡県	清水 英司様	5,000円
静岡県	豊田 龍二様	5,000円
岩手県	遠藤 律枝様	4,000円
埼玉県	長澤 剛様	3,000円
岡山県	宗澤 圭司様	2,000円
大阪府	長峰 年希様	2,000円

●設立10周年記念事業個人寄付金

東京都	町田 正弘様	50,000円
神奈川県	堀 裕雅様	50,000円
岡山県	土岐 博信様	30,000円
千葉県	阿部 秀藤様	30,000円
愛知県	齋藤 英彦様	20,000円
岡山県	喜多島 康一様	20,000円
宮城県	峯岸 正好様	20,000円
大阪府	岡村 隆行様	10,000円
愛媛県	戸田みどり様	10,000円

〈寄付受け付け専用口座〉

●郵便局からの振り込み

００１８０－９－５７３９０

●他の金融機関からの振り込み

金融機関名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：９９００

支店番号：０１９

預金種目：当座

口座番号：００５７３９０

口座名義：日本さい帯血バンクネットワーク

さい帯血バンク・パネルディスカッション

もっとクロスしよう　とる人、つくる人、つかう人

記念式典に先立つ大会初日午後１時30分から行われたこのパネルディスカッションでは、採取施設（とる人）、さい帯血バンク（つくる人）、医療施設（つかう人）という、それぞれの立場からパネリストとして10名が集まり、前半は講演、後半にディスカッションを行いました。

採取施設から休日のさい帯血も受け入れて欲しいとの要望が多かったため、京阪バンクでは休日も調製保存を始めたそうです。しかし、続けていくには人的負担が厳しく、どのバンクも京阪バンクのように休日対応することは不可能ではないかという現状報告がありました。また「休日に採取したさい帯血が翌日以降でも調整保存が可能であれば、善意を無駄にすることがないのでは」という意見も出ましたが、採取から保存までの時間がどの程度まで延長可能かは統一見解が出ていないということでした。採取施設の先生方は、さい帯血を効率よく採取する工夫や、アンケートの回収率を上げるための努力などをお話されました。今後もモチベーション維持のために意見を取り入れるようにしていくべきではないかと感じさせました。

今回、医療施設側の立場として移植コーディネーターの方がその仕事内容を紹介され、会場から「もし、私たちの病院でも移植コーディネーターがいたら、もっと安心して治療が受けられたのではないか」と患者家族の方から切望する声があったことが印象的でした。

座長は２人の正岡先生（右は大阪成人病センター顧問の徹氏と東京女子医大の正樹氏）

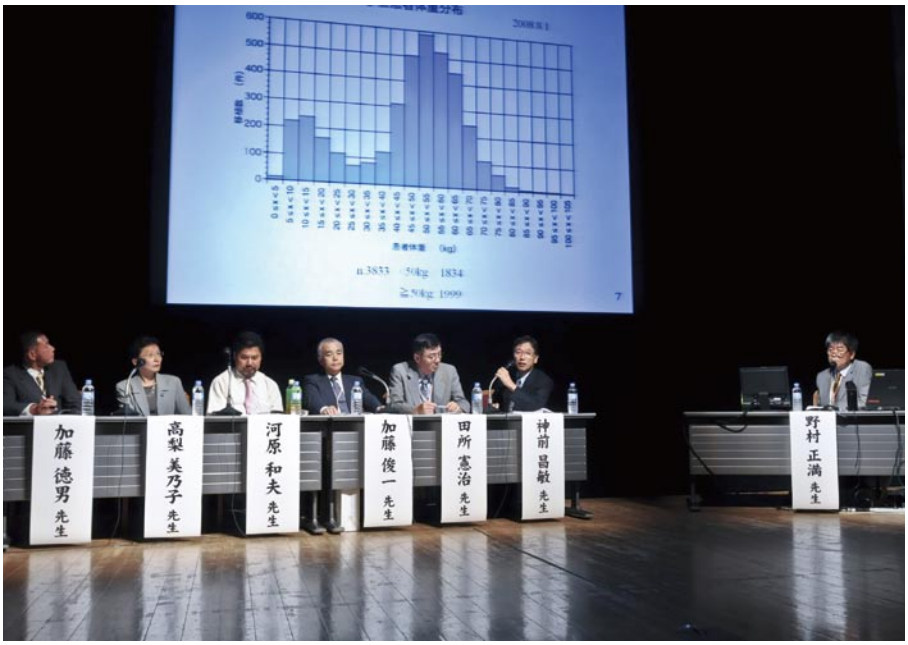
さい帯血解凍デモンストレーションも

パネルディスカッション「もっとクロスしよう」と「設立10周年記念式典」の合間を利用して、会場の井深ホールでは「さい帯血の解凍デモンストレーション」が行われました。移植に使われるさい帯血は液体窒素中に凍結したまま、さい帯血バンクから移植病院に運ばれます。移植病院では移植直前にこのさい帯血を解凍して患者さんに移植されますが、移植する細胞を生きたまま解凍するには、手際の良さが要求されます。いかに安全に素早く解凍できるかのデモンストレーションに会場の参加者は興味深く見守っていました。

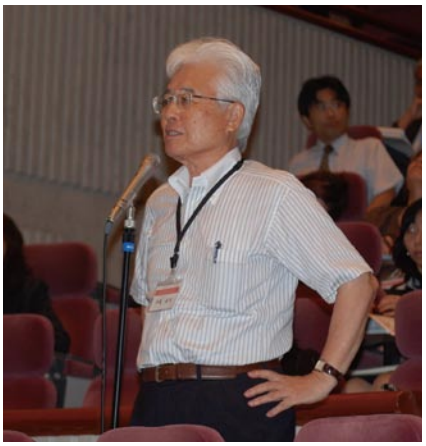
市民公開シンポジウム

さい帯血バンク・10年目の課題

大会２日目の午前10時からは「さい帯血バンク　10年目の課題」と題した市民公開シンポジウムが開催されました。はじめに座長の野村正満（日本さい帯血バンクネットワーク監事）氏からさい帯血バンクが抱える数々の課題が提起され、続いて各分野から６名のシンポジストを交えて、斬新かつ多面的な意見などが交わされました。移植症例数が飛躍的に伸び、事業は順調に推移してきた反面、様々な問題が表面化し、新たな問題も浮き彫りになってきました。全国11ある各バンクにおいては恒常的赤字体質問題、品質の標準化等の諸問題が、また国庫補助という経営基盤の脆弱性の問題等が挙げられました。これは骨髄バンクも含め、造血幹細胞を提供するバンク事業そのものが「民間の事業を国が補助する」という形態となっていることが根底にあるようです。これを法に基づく国の責任によって運営される事業とすることを望む意見がでてきました。また移植データ管理一元化に伴い日赤の更なる協力が求められています。「患者擁護」という観点からは患者への公平で正確な情報提供体制の整備の必要性などが挙げられました。その他、私的保存やネットワーク組織のあり方など、抱える問題は多々ありますが、10周年という節目をむかえ、これらの諸問題を具体的に解説するとともに、市民が参加する中で議論できたことはとても有意義なことでした。



課題提起と座長は野村正満監事


会場から熱心な意見の披露も

NIPRO

すこやかに、幸せに。
明日への夢、描きたい。

人から人へ、心から心へ、医療という名のヒューマンなコミュニケーションを広げたいー。真の健康を守り、幸福な社会を築くために、優れた医療器具を広くおとどけしているニプロ。
私たちニプロはさい帯血を採取保存する技術でさい帯血バンクを応援致します。

NIPRO
ニプロ株式会社
大阪市北区本庄西3丁目9番3号

両殿下も会場のパネル展示をご覧に

大会期間中、会場のロビー内でさい帯血バンクネットワークの10年のあゆみをパネル展示しました。さい帯血の採取から移植までの流れ、全国のさい帯血バンクネットワークの紹介、この10年の忘れえぬエピソード、さい帯血の現状と課題など、現在のさい帯血バンクネットワークの概要が一望できる内容となっており、来場された方は熱心に見入っていました。

同時に協賛企業も展示を行い、普段あまり目にすることのないさい帯血の貯蔵タンクなども実際に見ることができました。また、巨大な冷凍庫や冷蔵庫に入れられた飲み物やアイスクリームが企業のご厚意により無料で振る舞われており、この技術を応用してさい帯血の冷凍・保存が行われているのだなと妙な納得をしてしまいました。

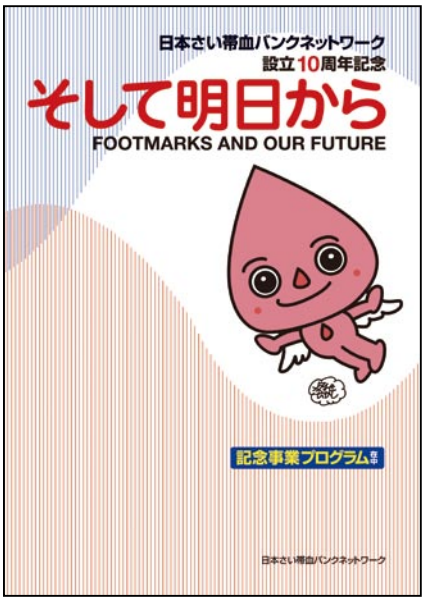
なお、１日目の記念式典のあとには秋篠宮両殿下もパネル展示をご覧になられ、秋篠宮妃殿下が入院されていた愛育病院の院長でもある中林会長に対して、熱心にご質問されていました。両殿下は10分ほどかけて展示をたんねんにご覧になり、会場を後にされました。

10周年記念誌を発行

大会参加者に配布

設立10周年を記念して日本さい帯血バンクネットワークでは、記念事業のタイトル「そして明日から　Footmarks and Our Future」と題した記念誌を発行しました。この記念誌はA4判で180ページにもおよぶもので、さい帯血バンクの歴史をはじめ、さい帯血バンクとさい帯血移植についての意義と解説、日本さい帯血バンクネットワークの仕組みや参加する全国11のさい帯血バンクの紹介、またこれまでにさい帯血バンクにかかわってきた方たちによるエッセイなどの読み物や資料集など充実した内容が盛りだくさんです。

さらに、10周年記念大会のプログラムも収載されており、大会参加者には全員に無料配布されました。なお、在庫が少々ありますので、希望者は事務局までお申し出ください。



10周年記念大会レセプション

楽しく親睦を深めた夕べ

記念式典を終えた29日午後７時から、会場を早稲田大学隣のリーガロイヤルホテルに移して、10周年記念のレセプションが開催され、関係者など約200名が集まって、懇親を深めるひとときを過ごしました。

参加者が会場に入ると、早稲田大学交響楽団・弦楽四重奏団の演奏の中、ウェルカムドリンクが振る舞われました。10周年記念事業企画実行委員会の谷口修一委員長の乾杯に始まり、海外からの賓客も参加し、ブロックスマイヤー博士とワグナー博士からも挨拶がありました。また、記念式典とレセプションの参加者の中には白血病と闘っておられる歌舞伎の市川團十郎さんもおいでになり、参加者と一緒の写真にお さまっていました。さい帯血移植を受けて元気になられた患者さんもたくさん参加され、ステージ上からメッセージを送りました。さらに、抽選会も行われ、おみやげを手にして帰路につかれた方もたくさんおいでになりました。

なお、記念式典とレセプションの司会はさい帯血の提供経験のあるフジテレビの木幡美子アナウンサーが担当しました。

市川團十郎さんのスピーチ

谷口実行委員長と早稲田大学弦楽四重奏団

司会はフジテレビの木幡美子アナウンサー

東海大学さい帯血バンクの紛失事件報告

この度、日本さい帯血バンクネットワークに加盟している東海大学さい帯血バンクから、移植用に提供予定であったさい帯血を紛失したために、移植が中止となった深刻な事態が発生との報告があり、９月１日に日本さい帯血バンクネットワークはこの事実を報道機関に明らかにしました。

当該さい帯血は、入院中の患者様に提供するための搬送作業において、保存タンクからキャニスター（さい帯血バッグを保護しているケース）を取りだし、さい帯血バッグの存在を確認した際にバッグが紛失していることが分かりました。

当ネットワークとしては、当該バンク及び移植機関とともに、患者様が一日も早く移植を受けるための機会の確保に向けて適合さい帯血の検索等を行い、支援していくこととし、あわせて、当ネットワークに加盟している他のさい帯血バンクへ今回の事例を通知し、注意喚起を促すとともに、当該バンクと協力して事実関係の把握と原因究明を行い、再発防止策を検討することにしました。

今回の事態が発生したことに際し、移植を受ける予定であった患者様やご家族、さい帯血をご提供いただいた皆様並びに医療従事者の皆様に心よりお詫び申し上げます。

この後、東海大学さい帯血バンクでは、さい帯血保管室の保存容器外の場所で、さい帯血バッグが発見されましたが、既に使用不可能な状態であったとのことです。ラベルがはがれており、確認検査を実施した結果、紛失していたものと同一のさい帯血との結論を得たということです。東海大学さい帯血バンクがある東海大学病院では、このような事態に至った経緯、原因について院内調査委員会で検討し、さらに学外委員を交えた検証委員会を実施するとしています。

連載　私とさい帯血移植「医師として患者として」

第9回◎ 退院へ

田結庄　彩知

無菌室を出た直後に、私は重症のカリニ肺炎になったが、主治医の早い判断で一命を取りとめた。次第に薬が効いて熱も下がり、あんなに苦しかった呼吸も楽になって起き上がれるようになった。どうやら助かったらしいということは分かっても、良かったとも嬉しいとも思えなかった。それよりも、この先にもまだまだつらいことが待っているような気がして、怖くて怖くてたまらなかった。ベッドの上で寝ていても、ソワソワして落ち着かず、自分の居場所はどこにもないような、変な感覚だった。個室で独り、夜を過ごすことも耐えらなくなって、看護師さんの許可をもらって父が付き添ってくれた。自分ではまだ歩けないのに、じっとしてもいられない。足をさすってもらっても手を握ってもらっても、気持ちは落ち着かなかった。「同じベッドで添い寝をして欲しい」とありったけの力で父の手を引っ張り、泣きながら頼んだ。父に抱きしめられても、まだ安心できなくて、子供のように声をあげて泣きじゃくった。とにかく目の前にある何もかもから逃げたくて、薬で一日中うとうと眠った。放心状態でぬけがらのような私に、母は「しっかりしなさい」とも「がんばりなさい」とも言わずに、じっとそばで見守ってくれた。その姿を見ると、「このままじゃいけない、いつまでも逃げ続けるわけにはいかない」と思うが、なかなか立ち直るきっかけをつかめなかった。病気が分かったときも移植が決まったときも、どんなに絶望的な状況になっても「逃げないで、前だけを向こう」と心に誓って、病気と闘ってきた自分を、何とかして取り戻したいと思った。両親にいつでも甘えられる環境にいることが、だめなのかもしれない。主治医に「個室から出して欲しい」と頼み込み、部屋を替えてもらった。自分は強い人間だから必要ないと拒んでいた精神安定剤も、少しでも心が落ち着くのであれば、と内服するようになった。

しかし、私の気持ちを無視するかのように、今度は一日に数十回にも及ぶ、激しい下痢が始まった。原因を探るために検査を受け、GVHD（移植片対宿主病）によるものだと分かった。GVHDとは増えてきた新しいリンパ球が患者の細胞を攻撃して起こる移植後の合併症で、さい帯血移植を受けた患者はその程度に差はあっても、誰もが一度は経験するものだ。それを分かってはいても、次から次へと襲ってくる出来事に「もう家になんて……帰れないかもしれない」と弱気になった。そんなある日、ナースステーションから「おめでとうございます」という声が聞こえた。私より後で移植を受けた患者さんが、元気に退院していく。焦りと、うらやましさと、ねたましさで、胸が張り裂けそうになった。私だって帰りたい、一日でも早く帰りたい。イライラする気持ちは、今までは決して疑うことのなかった主治医にも向いてしまい「全然良くならないから薬を変えてほしい」と言ったり、治療のために必要だから、と勧められた検査を拒否することもあった。そんな私を見捨てることなく、主治医や看護師さんは粘り強く支えてくれた。また、廊下で他の患者さんと話をする機会も増えて、苦しんでいるのも、思い通りにならないのも、私だけじゃないんだと思った。治るまでには時間がかかるという現実も受け容れることができて、また爆発しないように、うまく気持ちをコントロールしようと思った。以前のように、強がったり、冷静でいようと無理をしたりはせずに、感情にまかせて

10周年記念レセプションに参加した筆者

泣いたり、笑ったりしながら毎日を過ごすうちに、ゆっくりと快方に向かいはじめた。やがて食事がとれるようになり、点滴もいらなくなって、ついに退院する日が決まった。数カ月に及ぶ入院で病室にあふれていた荷物が、毎日少しづつ減っていき「この部屋から出て、家へ帰ることは夢じゃないんだ」と思った。長い間首に入っていたカテーテルを抜いてもらう瞬間は、病気からも移植からも解放されて自由になれた気がした。

「退院したら何をしたい？」

母にそう聞かれても、不思議なことに何も思い浮かばなかった。生きて家に帰れるということで私には十分だった。玄関の鍵を開ける自分の姿を想像するだけで、涙が出るほど嬉しかった。退院の当日、久しぶりに履いたジーンズは、ずり落ちるぐらいぶかぶかで、こんなに私は痩せてしまったのかと驚いた。主治医にお礼をいい、お世話になった看護師さんに挨拶をして病院を出ると、見たこともないくらい美しい青空が広がっていた。いのちがあることは、生きていられるということは、なんてステキなんだろう。今まで支えてくれた全ての方々に、私に生きるチャンスをくれたお母さんと赤ちゃんに、心の底から感謝した。

筆者プロフィール
たいのしょうさち◎1977年神戸市生まれ。2002年、香川大学医学部卒業後、国家公務員共済組合虎の門病院内科にて研修。2004年、重症再生不良性貧血と診断。ATG療法施行も効果なく８月にさい帯血ミニ移植を受ける。2005年、虎の門病院を退職し東京医科大学大学院に進学。2007年６月、晩期生着不全で再入院。７月、２度目のさい帯血ミニ移植を受け、８月に退院し今に至る。

移植病院訪問

③名古屋第一赤十字病院

移植に欠かせない検査、過去の標本は数万

― 血液検査室と分子細胞検査室 ―

名古屋第一赤十字病院は、国内でも指折りの骨髄移植やさい帯血移植など造血幹細胞移植を行う施設ですが、中村区にあることから「中村日赤」と呼ばれ、70余年にわたり名古屋市民に親しまれてきました。歴史を物語る建造物が映える半面、老朽化も進み全面建て替えとなりました。６年間の工事が完了し今年１月、リニューアルオープンとなりました。工事期間中利用できなかった地下鉄「中村日赤」駅からの連絡通路も一新され、明るく落ち着いた雰囲気の「画廊」といった感じに変貌しました。そんな通路を悠々通り抜けて、今回は「血液検査室」と「分子細胞検査室」にお邪魔しました。

新生・名古屋第一赤十字病院は、西棟（外来）と東棟（入院）、エネルギー棟からなり、血液・分子細胞の両検査室は西棟３階の諸科外来待合のすぐ横にあります。扉を一枚開くと、整理された空間にパソコンと大型ブラウン管テレビ大の機械が目に入ります。フローサイトメトリーです。「ここは分子細胞検査室です。この機械でCD34陽性細胞やその他さまざまな細胞を読み取ることができます」と説明してくださるのは臨床検査技師の池口美代子さん。室内はいくつかのスペースに仕切られていて、移植用さい帯血などを保存しておく細胞保存室、クリーンベンチ２台などを備えた無菌細胞調整室などが隣接されて一括して作業が行えるようになっています。

骨髄標本をみる技師

自動化でも目視で

さらに奥に進むと、血液検査室です。細い管が何十本と繋がった機械は、採血した検体をスライドにのせて標本を作り、血球等16項目をカウントします。一度に10本程度の検体を処理する働き者です。「スペースは以前に比べて狭くなりました。」というのは検査技師歴25年になる岡崎優さん。狭い通路に８人のスタッフが往き来するのは少々不便でもあるようです。これだけの自動化が進んでいれば技師の仕事もさぞかし楽なものであろうと思いきや「通常の血液検査なら十分ですが、この施設は多くの血液疾患患者を見ているので、少しでも悪い細胞などを見逃さないよう、目視による検査も行っています。」慣れるまでには少なくとも5年の歳月は必要とのこと。機械の穴を埋める技術職はかなりの熟練を要する仕事のようです。

すべての標本を保存

造血幹細胞移植施設を備える施設では、入院している血液疾患患者の血液検査は通常週２～３回は行われます。ここでも月・水・金の週３回が通例となっています。技師の村上和代さんは「月・金曜日は通常より１時間早く出勤しています。」と。外来患者分のみの他曜日に入院患者の分が加わり、検査検体が増えるということも理由の一つのようですが、「多くの入院患者さんが検査結果を心待ちにしている。移植後の患者さんにとっては切実なので」とも。また村上さんは「細胞の顔色、顔つきを見ているんです。」といって案内された部屋には幾つもの引出しがついたキャビネットと大きな長机が。机にはいくつかのレンズをつけた筒を左右にのばす顕微鏡が。スライドを載せると、筒についているレンズから顕微鏡と同じものが見られる仕組みで、医師らのカンファレンスなどにも使われます。「ここには過去すべての骨髄標本があります。」引出しに一杯詰まったスライドの山からお目当てを見つけ出すのは、よれよれになった数十冊のノートの役目です。「以前の病棟で雨漏りに遭っちゃって」と苦笑いの村上さん。でも引出しの中には闘病の歴史と、無言で語る数万もの骨髄の表情が、ぎっしりと詰まっているのでした。「患者さんの顔は見えなくても、細胞の顔をみて一喜一憂しています。」病棟は新しく変わっても、レンズを通して患者を見つめる眼差しに変わりはありませんでした。

両検査室のスタッフのみなさん